

H29/7/12・14 H30/3/23

子持ち御前社

海拔135.7メートルの竜王山中腹 管理者/萬福寺

橋高榮一

1. 境内の句碑と案内板 県内有数のく子宝子育て>スポット。近くの山の上にあった弁財天の社に、1723年本尊の子安観音が合祀され、1969年の石油コンビナートの建設で



現在地へ移る。眼下に周防灘が広がる。

昨年の7月、既に境内の辺縁部は鬱蒼として颯空の碑は緑に埋もれ、爽雨のみ拝観した。

冬枯れが山の姿を変える2月、颯空の句碑が覗いていた。突然の寒波が3月23日に去り、萬福寺さんの了解のもと下枝を切り払う。建立者が碑に選んだ小ぶりな岩は、自然によって僅かに流体力学的フォルムを与えられ、宙を飛ぶ礫(つぶて)をどこかイメージさせた。海風で8カ月前にパネルを支えていた案内板の下枠は赤錆で地面に転がっている。

「はしなくも十歩を隔てて爽雨・颯空師弟相見の句碑となり深い縁(えにし)を思う」— 結びのことばに込められた敬慕の情が心に沁みる。風化に有効な身近な技術と地域情報誌の意義を痛感する。

子育て御前祭の4月 境内全域は萬福寺により神域の佇まいに変わり、県外からの鳥居や灯籠の寄進がある境内は、お手玉大の巾着を奉納して祈願する内外の人々で今年も賑わった。

〈追記〉 本号の発刊に合わせてWEB(2017)版ポエム散策②を新たに書き下ろした。



(7/14/2017 撮影時の案内板)

2. 皆吉爽雨のプロフィールと句碑 明治35年(1902)2月7日福井市に生れ17歳頃より高浜虚子に師事、昭和21年(1946)より俳誌『雪解』主宰に専念する。昭和28年(1953)及び39年(1964)の5月の二度小野田に吟遊。この句碑は爽雨師の古い門弟であった石川麓が昭和47(1972)年5月爽雨師四番目の句碑として建立。(全国に九基ある) 昭和58年(1983)6月29日享年81歳にて没す。

新茶くむつひのしづくにカあり 爽雨 (1) ことばの意味 ①【くむ】漢字で

書くと[汲む](酒は)[酌む]: 高校の古文や伝統的な俳句の世界の用法で①茶・酒などを器に注ぐ/特に酒を注いで飲む(明鏡)を意味する。②【つひの(終)のしづく(しずく)】

—したたりおちる最後の最後の一滴（液体の一粒）。

(2) 言葉の風景 ①「ごはんくんで！」4歳の次女が高々と茶碗を



突き出す。家内は流動食ではない、いつもの固形のごはんを装ってやった。今回、類義語を調べると『汁やご飯を器に整えて盛る』を意味する社会性の濃い『よそう』は10世紀以来の用法。万葉仮名で表記する時『美しく飾り整備する』を視覚的にも強調する漢字を自在に当てている。(8世紀半)「四天王の像とを巖(ヨヒ)」「皇子の御門を神宮に装束(ヨヒ)」(日本国語大辞典)



②【つぐ】「注」は液体専用で、ごはんは一般に「つぐ」と書く。

③爽雨の句碑に刻まれた【しづく】(左)は辞書の見出し語から消えているが、流麗で豊かで視覚的にも私の心を和ませた。(上は全景)

(7/14/2017 撮影)

(3) 句のリアルと省略の魅力 僅か数語を配置して俳句は千変万化の姿を見せる。

- ①<空をとぶバイクみたいなハチがくる>小1男(NET)：定形リズムが機知に富む愉快な景色に仕上げています。海はお魚の空だ！など「類推」の力は科学と詩の武器になる。
- ②<天の川 露台にのこる 椅子二つ>夢二：美しい句だと思う。「二つの椅子」が伝える喪失感を美しい天の川が一層切なくする。もう二人で星空を眺めることは無いのだと。
- ③<いなびかり 終に子のなき 閨照らす>山口誓子：一瞬の稲妻に人生の道のりが浮かび上がる。優しく寄り添って生きた二人。子室に恵まれなかったさみしさを見詰める。
- ④<雪はげし 抱かれて息のつまりしこと>橋本多佳子：純白の雪と愛の激しさが重なり情念の吹雪に埋まるかの如き迫真の一句である。70年前の作。物語の極致を切り取る精練された詩形。「女性たちの永遠の憧れ」(『俳句界8月号』浦川聡子氏の評)。詩情豊かな日本の四季と関連づけることによって、世界最短の詩形の一つ、俳句の主題は、途方もない広がりを見せる。言語化されない部分—省略や余白を読者の補完に委ねて—

英国 W. ブレイク 1757-1827 の詩に「一粒の砂に世界を見／一輪の野花に
天国を見る／その掌中に無限を／一刻の中に永遠を掴みし者」
(拙訳)とある。一滴の新茶に何をみるか——

ことばの緊張関係は<序-破-急>の構成である。一瞬の謎解きを仕掛け新茶の香り季節へ誘う。目の前の情景の中に自分が存在する感がある。ある日、師が茶をふるまう。あるいはその逆であろうか、「力あり」に私は三つの力が渾然となった様を観る。

新茶を器になみなみと注ぐ。香り立つ自然の恵みの凝集—その最後の
最後の一滴に、上質の新茶への自信もてなしの心がこもる。

3. 伊藤颯空のプロフィールと句碑 颯空は元小野田助役。俳誌『雪解』(ゆきげ) 同人で郷土史家でもあった。皆吉爽雨を師とし昭和28年5月に小野田に招聘している。「小野田俳句会」の創設者伊藤の清廉な人柄を偲び竹馬の友であった吉屋北斗が昭和46年に建立した。案内板は平成3年9月「小野田雪解句会」が設置。

鶺鴒より今朝は笹子の早く来し 颯空 (1) ことばの風景【鶺鴒】=ヒ(火)+タ

キ(焚き)であろう。(ヒッヒッと火打石を打つ音で鳴く)

季節は鶺鴒の子が巣立つ仲冬、いつもは鶺鴒(ヒタキ)という小鳥が早く来るのだが、今朝はなんと鶺鴒の子が先に来て鳴いている。冬月半ばの誠に微笑ましい小鳥たちの姿だが「早く来し」に私は微かな〈決断〉の気配も感じる。幼い鳥の、あるいは作者のかもしれないが。



(2) 17文字のインパクト—極限の簡素と豊かな心象

① 心象は想像力が心に描く具体的な情景—環境や体験を基 (3/23/2018 伊藤颯空句碑) にする：さて、その場所は池を囲む小高い住宅地で、当時は台風の通路だった。顔に吹きかかる小枝や葉っぱは2キロ先の海の味がした。お隣の煙突が東に90度折れ曲がり、台風の“目”に青空を見、再び次第に直立してゆく不思議な光景を目撃した。

ある日、理科大に誘致していた放送大学に事務室長として出向している沖田さんが、庭木の状態を調べに来てくれた。裏の木立を見てしきりに懐かしがっている。「子供の頃は手ごろな山と谷だった」という。「よく遊んだなあ」と谷を見つめる顔になっている。

つまり一帯は鶺鴒の領分だったのだ。この時分は、「ホーホケキョ」「ケキョケキョケキョ」という声をよく聞いた。少し離れて「ホーホキョケ」も聞こえて来る。《本鳴き》の境地にいる成鳥は、「？」と絶句し絶妙に沈黙する。

ある朝、若い鶺鴒が先輩たちに「うぐいすの谷渡り」と呼ばれる《正調》を聞かされてやり直している。(としか思えない。) 鳴き声がひとしきり響き合い、やがて長閑な「ホーホケキョ」「ホーホケキョ」一色になる頃には家内と私が「ホーホキョケツ」と幼い鳴き声を真似ると、「？」、「？」、どちらもが絶句するのだった。

② 例の「笹子」は、あの朝、本格的に歌の練習を始めようと、鶺鴒より早くやって来たのではないだろうか、生命の歴史を刻み続けたこの種族の体内時計が、遠い「春」を感知して、《春モード》にシフトした、そういう説明もあり得ると思う。唯、《動物機械論》に墮してしまうのは、あまり好まない。大切なものを護るために小さな命を懸けて闘うか飛び去るか、一瞬の決断はその日常にもあることだろう。

あの子は、春の美しい歌へスタートを切った。だから早く来ることにしたのだ、きっと—

天地にみなぎる生気が万物を生育すると昔の人は信じ、これを「(元)気」と名付けた。

この微笑ましい情景に、私は小さな命のもつ《清冽(せいれつ)の気》を感じる。「決断の気配」の二つ目はこの叙景を「早く来し」によって簡潔に「描き切った」点だ。

ある朝のく真実>が読み手の心にくっきりと造形されて、誰も朝となる。

朝の光、空気の冷たさ、チャッチャッチャツという鳴き声と時々跳ねる梢

他の小鳥の鳴き声が聞こえ始める。朝の空間が広々と開けている—

(きつたか えいいち/日本英語表現学会評議員)